
もし元最強サッカー少年が、ソフトテニスを始めたら

アメリカンなお調子者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もし元最強サッカー少年が、ソフトテニスを始めたら

【Nコード】

N2200T

【作者名】

アメリカンなお調子者

【あらすじ】

通称「もしテニ」

サッカー最強のゴールキーパー、佐野元太は、中学になったとたん突然、ソフトテニス部に入ると言い出す。

そして、刀狩中は全国大会目指すために日々努力する

第1話

後半ロスタイム、自分側の陣地に、ドリブルをしてきた相手のFWがペナルティエリアに突っ込んできた。

チームメイト「元太ー！！！！止めてくれー！！！！！」

チームメイトの声を受け取りながら、相手のFWとの1対1となる。

元太「……こおおおおおおおおい！！！！！」

相手は足をチャージして一気に蹴ってきた。

右上に蹴ってきた。ポストギリギリで入りそうだ。

俺は飛びついた。ボールはギリギリ人差し指に当たってそれた。

ガンツ！！！！ポストに当たり、ボールははじかれた
その瞬間……

ピーーーーーーーーッ！！！！

長い長いホイッスルが鳴った。

我ら^{かたながり}刀狩小学校が、ついに全国制覇したのだった！

元太「っしゃああああああああああっ！！！！！！！！！！！」

あの優勝から、早5ヶ月。

刀狩中学校入学式を始めます。

俺の名は、さのげんた佐野元太、小学校時代は
サッカー部の守護神、ゴールキーパーGKとして、全国制覇も果たした。

諒「よう！元太！サッカー部入るだろ？」

こいつの名は、伊藤諒、親友で、サッカー部では、補欠だったが
かなりの動きが鋭い奴で、かなり運動神経がいい。
俺と同じ部活入るつもりらしい。

元太「まあな、そのつもりだ」

当然、サッカー部に入るつもりだ、刀狩小は、古くからサッカーの
強豪だったが

刀狩中は、さほど強くない、県に行けたらいい方のチームらしい
入学式が終わったので、自分の教室に戻る事にした。

俺は1 - 1、諒は1 - 3だ。

菊地「入学おめでとう！1年1組のみんな！俺は担任の菊地宗一きくちむねいち
です！」

少し小太りで、目が細い、今年から刀狩中学校に転入してきたそう
だ。

菊地「ちなみに、ソフトテニス部の監督です！よろしく。」

俺は話を遠く聞いていた、

元太（さっさと帰って、キャプ翼でも読んでえな）

そうすると、ある思いもよらぬ一言が、俺の耳を走った。

この一言が

俺の青春を大きく変えるとはこの頃は思っていなかっただろう。

菊地「やりたい事は、進んでやればいい。好きじゃない事を進んでやる必要はないよって俺は思う」

その時、俺に疑問符が浮かんだ。

俺は本当にサッカーが好きなのか？けど、サッカーをしている時は
たまらなく楽しい
けど・・・勝つ事になれすぎているのか？

試合は全然楽しくない。

むしろ、まだランニングしてたほうが楽しい。

負けるか勝つか分からないからスポーツは楽しい。
ずっとそれを考えて一日過ぎた。

菊地「あと、入部届は明日までに俺に出しといてね」

・・・さあ、どうしよう？

サッカーは嫌いじゃない。しかし楽しいとは思えない。
・・・決めた。

俺は、携帯を取り出し、諒の携帯に電話をかけた。

諒「どうしたー？元太ー？」

元太「諒・・・悪い、俺・・・ソフトテニス部に入る。」

第1話（後書き）

佐野元太 153cm 40kg 前衛
ラケット Xyst T-1

元サッカー部の天才少年。
体は小柄だが、ゴールキーパーをしていた。

第2話

諒「え？サッカー部入らないの？俺は構わないけど・・・」

諒は本当に軽い奴、俺とならどこでもいいらしい

元太「急に悪いけど、サッカーを楽しむ気持ちというのが無くなっただ」

諒「ふーんじゃっ、俺もテニス部入るわ」

元太「悪いいな。」

ピッ

電源を切った

元太「ラケットでも買いに行くか」

俺は、倉庫からチャリを出し

隣の「DEPO」という店にラケットを買いに行った。

そして、ラケットコーナーに足を止めた。

元太「YONEX・・・8VREV・・・うーん・・・デザインいいし、これにしようかな」

俺は、黄色いラケットのNANOFORCE 8VREVを手にとった。

第2話（後書き）

伊藤 諒 157cm 48kg

ラケット Xyst ZZ

なんでも軽い奴で、何事も本気になれない。
元太の古くからの親友。

第3話

・・・で、

結局俺はこのXyst T-1を上手い口車にのってしまい購入してしまった。

T-1「よろしくな！」

こいつによると、この声が聞こえるのは、俺だけであり他の人には聞こえないという

元太「さーて明日から練習だ！」

・・・

小笠原「はい、新入部員並べー」

その言葉に1年生が、一列に並ぶ。

小笠原「俺は、キャプテンの小笠原祐作だ。」
おがさわらゆうさく

倉田「倉田陸郎だ。副キャプテンだ。よろしくな」
くらた りくろう

その声に、1年生の6人がよろしくお願ひしますと礼をした。
ちなみに、3年生は4人、2年生は2人、1年生は6人と人数が少ない部活だ。

小笠原「ちよつと実力テストでもしてみるか、前衛と後衛に分かれ

る」

みんなパツと3人3人に分かれた。俺は前衛だ。諒は後衛だったようだ

小笠原「ボレーは分かるよな？それをする、堂々とボレーして構わないぞ。」

ボレー練習が始まった。1番最初に立ったのは、刀狩じゃなく、他の小学校からきたやつだ。

そいつ「ヒツ！！ヒツ！！怖いっす！速いですよ！！！」
ボールを怖がり、よけている。

つづいて次の奴も怖がり、よろめいていた。

小笠原「どうした！？どうしたー！？ちゃんとしっかりやれー！次！」

俺はネット前についた

小笠原「行くぞ！」

スパアアアアアッ！！

豪快な球出しが来た。しかし俺はビクともせず冷静に……

スパアアアアアッ！

サイドに綺麗に決まった。

その時、ふと奥から、菊地が現れた。

菊地「おもしろいじゃん、元太君、諒君。いつその事、このキャプテンチームと試合してみる？」

T-1「試合か！デビュー戦じゃん！」

小笠原「構いませんが・・・」

菊地「うん、試合は5ゲームマッチ、審判は誰か適当についてね」

・・・

5ゲームマッチプレイボール！

第3話（後書き）

小笠原祐作 172cm 57kg

ラケット：NANOFORCE 5V REV

部内をまとめる最高のキャプテン。

実力は、県大会優勝レベル

スパアアアアアアアアッ

またもファーストサーブが入った。

小笠原「ショットが駄目ならロブだっ！」

スパアアアアアアアアッ

前衛にいる元太の真後ろに落すロブがあがった。

諒「なんのっ！」

スパアアアアアアアッ

諒が追いつき、鋭く深いショットを倉田に返した。

そして、諒と倉田の激しいラリーが続く……

小笠原（さあ、佐野元太よ、いつしかけてくる……!? かねー
ならっ……俺が行くぜ!）

小笠原が、諒のショットを素早く追いつき、ボレーをした。

諒「なっ!?!」

小笠原「どうだ!」

元太「左右の動きはGKで慣れてるんでね!」

本能的に体が動いた。真横に叩かれたボールに追いつきバックで倉

田に返した。

倉田は急にきたボールに対応できず、ネットになった。

元太「おしゃあっ!!」

諒「ナイスだっ!元太!」

...

倉田「なんだ・・・こいつら。」

小笠原「強いな・・・」

倉田「大丈夫だ。あいつらはいくらなんでも初心者。経験者には勝てないはずだ。」

小笠原「ああっ、前衛は上手いからまずいいとして、後衛の伊藤は、ラリーはそこそこできるが
お前のショットと同等には打てていない。大丈夫だ。」

倉田「おし、じゃあ後衛狙うぜ」

2 - 0

元太「悪いっすね、俺、地獄耳なんで。」

倉田「なっ!?!」

元太「けど、ラリーする前に・・・俺のサーブとれないっすよ!」

T-1「そつだそつだ！」

元太「行きます！」

高くトスをあげ、落ちてきたボールを高い打点から振り下ろす。

ズドオオオオオオオオオオオオオオオオツ！！！！

倉田「なっ！？」

スパアアアアアアアアアアツ……

3-0

元太「さあ、どんどんいきまっせ」

このまま佐野・伊藤ペアは、3ゲーム連取し……

審判「ゲームセット！勝者、佐野・伊藤ペア！」

小笠原「初心者に……、負けた……！？」

倉田（ラリーでは勝ってたのに……あの、佐野元太！）

菊地「凄いな。初心者とは思えねえ、新1番手決定だ。」

そうすると、小笠原が俺の胸グラを掴んだ。

小笠原「俺は絶対認めねえ！次は絶対に勝つ。」

元太「よろしくお願ひしますww」

倉田「君上手いね。よろしくな」

諒「はい！よろしくお願ひします！」

そうすると物陰に居た、一人の少年に、菊地は気付いた。

菊地「君誰だい？」

布袋屋「…………おもしれえじゃねえの、俺の名は布袋屋虎太朗だ。
ほていやこたろう

」

菊地「ナマイキじゃねえか、テニス部か？」

布袋屋「入るかどうか迷ったが、今の試合見てきめたよ。入るわ」

菊地「はあ…………じゃあ、入部届くれよ」

布袋屋「フツ…………」

そうするとその少年は消えた。

倉田「あいつは…………!？」

小笠原「全日本小学生ソフトテニス大会優勝者！布袋屋虎太朗!!」

第4話（後書き）

倉田陸郎 169cm 58kg

ラケット：NEXTAGE 70S

みんなの面倒見がよく、みんなから愛される存在
小笠原とペアを組み、県大会まで行った。

第5話

午後5時、1週間後にひかえた春季大会にそなえ紅白戦をしていた。

スパアアアアアアアアアアアッ

諒「おっしゅっ！」

元太「ナイシヨツ！」

小笠原「あめえっ！」

スパアアアアアアアッ

高いロブが上がった。しかし、風に伸び……
ポーン……

審判「アウト！ゲームセット！ 勝者、佐野・伊藤ペア4 - 0！」

小笠原「くそっ！また負けたっ！！！」

倉田^{くわだ}……

菊地「……」

そうすると、後ろからボールを打ってきた男がいた。

ズバアアアアアアアアアアアアアアアアアッ、

物凄い快音で、サービスラインを切る打球、
振り向くと・・・

布袋屋「よーっす、今日から練習参加するわ」

諒「ほていや・・・こたろう!」

そうすると、ラケットを突き出し、諒に向けて言った。

布袋屋「これからお前とシングルスをして、勝った方が次の1番手だ。いいな?」

菊地「いいだろう」

元太「先生!？」

諒は、ラケットをパチンと返し、逆に布袋屋に向けてラケットを向けた。

諒「望むところだ」

菊地「横浜市予選の組み合わせが決まった、初戦は、浦賀中だ！」

小笠原「浦賀か・・・クセだらけの集団だな。」

倉田「特に1番手の、米山勇輝・山？怜ペアはかなりの腕前だ。」

菊地「明日はビシッと勝って、県大会決めるぞ！」

オーダー発表

1番手 布袋屋虎太郎？・佐野元太？

2番手 倉田陸郎？・小笠原祐作？

3番手 伊藤諒？・藤澤風雅？

そして、試合会場へ・・・

審判「これから、刀狩中VS浦賀中の試合を始めます！」

お願いします！！！！

・・・

オレは、コートに入り、乱打を済ませ戦いの場に入る。

審判「7ゲームマッチプレイボール！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2200t/>

もし元最強サッカー少年が、ソフトテニスを始めたら

2011年7月13日18時19分発行